



若者の異文化理解における「カルチャーショック」に関する調査 ～フィリピンの少数民族「アエタ族」を例にして～

筑波大学附属視覚特別支援学校 高等部普通科3年 山宮叶子

1 調査の動機

- ①NPO「フリー・ザ・チルドレン・ジャパン」が主催するスタディツアーでフィリピンに住む先住民族のアエタ族のコミュニティを訪問（2023年3～4月）
- ②ホームステイを通じて異文化体験→カルチャーショック、異文化への適応について考えたい

2 調査方法

- ①文献調査
- ②NPOのスタッフへのインタビュー（認定NPO法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンのスタッフ2名）
- ③スタディツアー参加者と一般の学生へのアンケート調査

〈補足〉

(1) アエタ族

- ・ルソン島北部の山間に住むフィリピンの先住民族
- ・フィリピン諸島に住み始めた最初の民族の一つと言われている
- ・ジャングルで生き抜く術を持っている民族で、ベトナム戦争の時には多くのアメリカ軍がアエタから訓練を受けた
- ・貧困や人権問題、不十分な教育などの問題を抱えておりNGOのような団体が支援を続けている



(2) カルチャーショック・異文化への適応について

- ・カルチャーショック：異文化に接することで生じる内面の様々な変化のことを総合的に意味する
- ・異文化理解における典型的な内面の変化：ハネムーンステージ→カルチャーショック→適応開始期→適応期

調査② NPOスタッフへのインタビュー

- Q：異文化体験にはどのような意味があると考えますか？
A：自分の文化と大きく異なるものに触れておくと、身近な人も文化として想像力を膨らませて、寄り添えるようになる
→異文化理解から他者理解へ

調査③ アンケート調査

ア. スタディツアー参加者（回答件数：8件）

- Q1：実際にアエタ族のコミュニティを訪れて、訪問前に提供されたアエタに関することと違いを感じた点は何か？
A1：※（回答を一部抜粋）
- ・扇風機などを使っていて電気があったこと。
 - ・アエタコミュニティについては事前にほとんど知識がなかったので、ギャップというのとはなかった。
 - ・自然に近い暮らしの過酷さが一番想像と違っていた。その過酷さは主に衛生面から感じていた（トイレなど）ので慣れればそうでもないのかもしれないが。

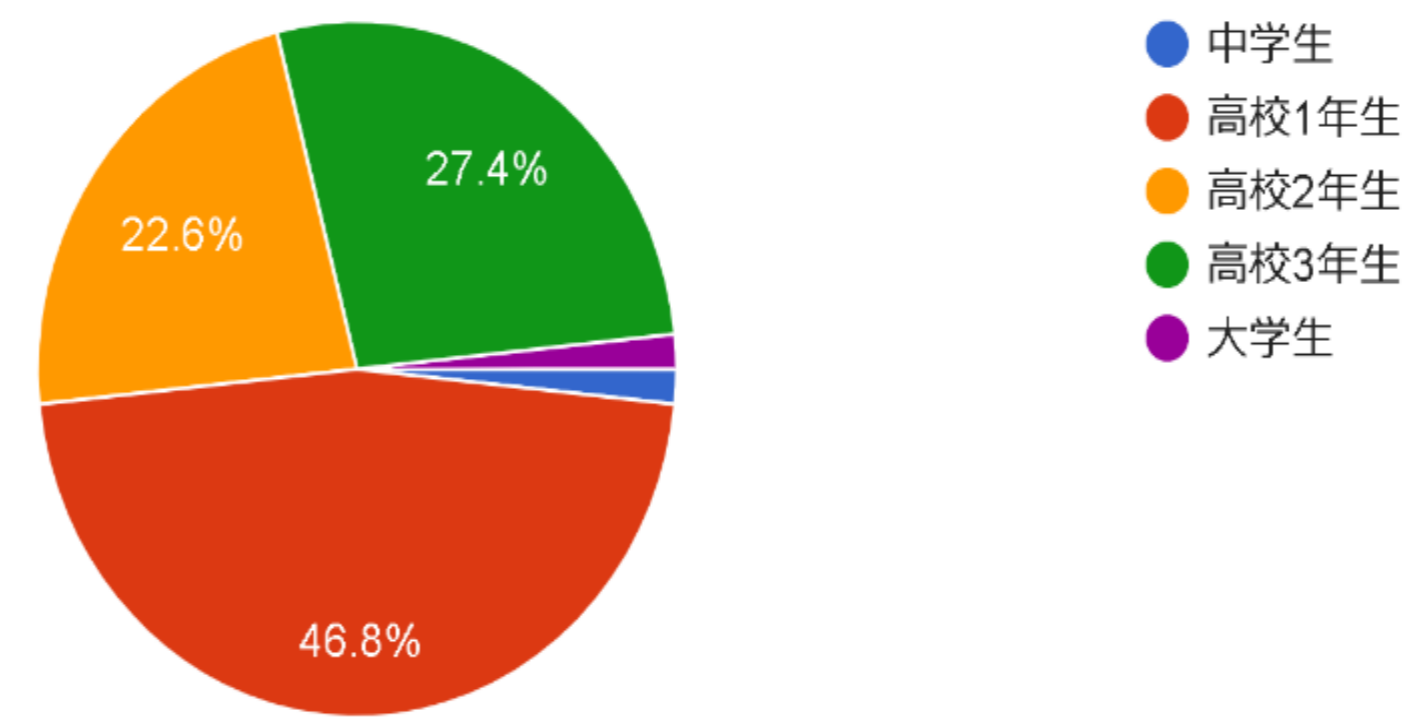
- Q2：ツアーを通して、「異文化を理解すること」について持った考えは何か？
A2：※（回答を一部抜粋）
- ・文化はその人が人生において大切にしたいことに大きく関係していると学んだ。
 - ・座学で勉強するだけでは完全に理解したとは言えないと感じた。異文化はその文化に飛び込んで一緒に暮らしたり話したりする中で感じとるものだと思った。

- Q3：アエタコミュニティに住み続けたいと思うか？
A3：※（各選択肢の回答者数とその理由を抜粋）
- ・ずっと暮らしても構わない：1
→ホームステイした2日間、とても幸せだったから。もっとこの村の人たちと仲良くなりたいと思ったから。
 - ・期間を区切ってなら暮らしても良い：4
→お風呂がないこと、トイレなどの衛生面が整っていないから。1週間くらいなら可能だがそれ以上は体力がもたないと思う。
 - ・暮らしたいとは思わなかった：3
→2日のみ過ごし、日本に帰ってきた今となっては、環境の違いを思い出すことが多くあまり過ごしたい気持ちがわからない。

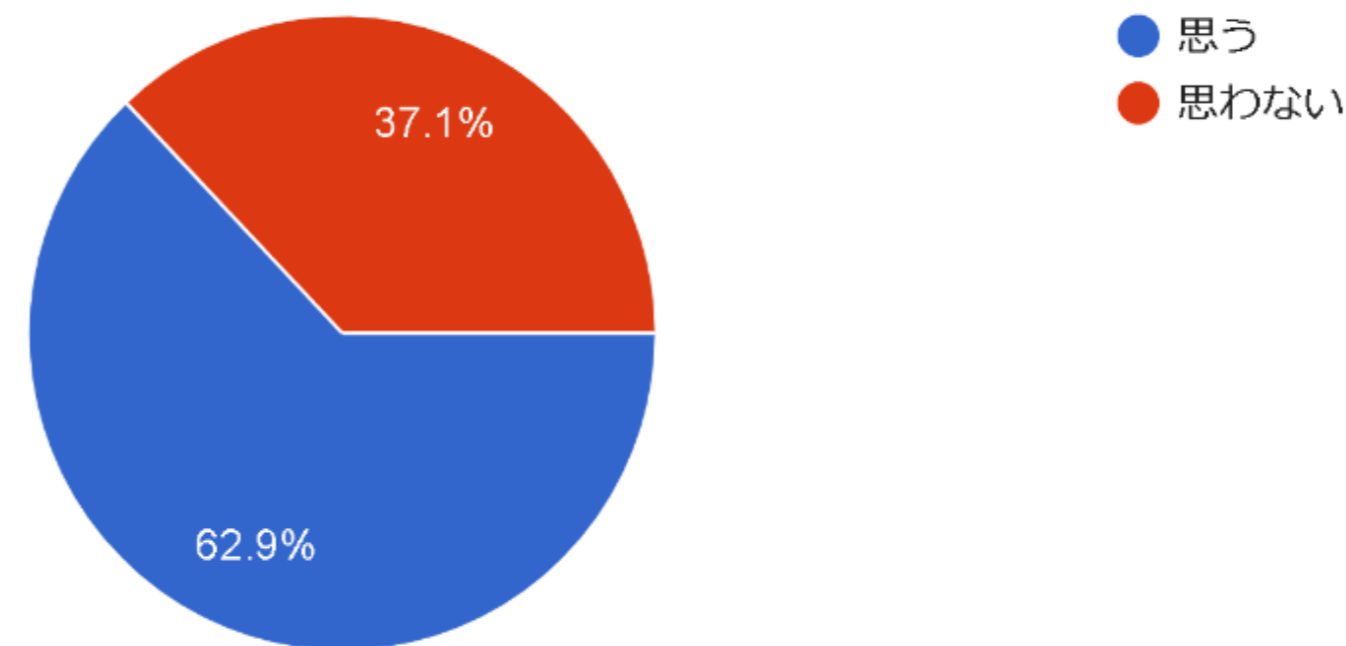
イ. 一般の学生（回答件数：62件）

〈回答者の属性〉

- ①学年を教えてください。
62件の回答



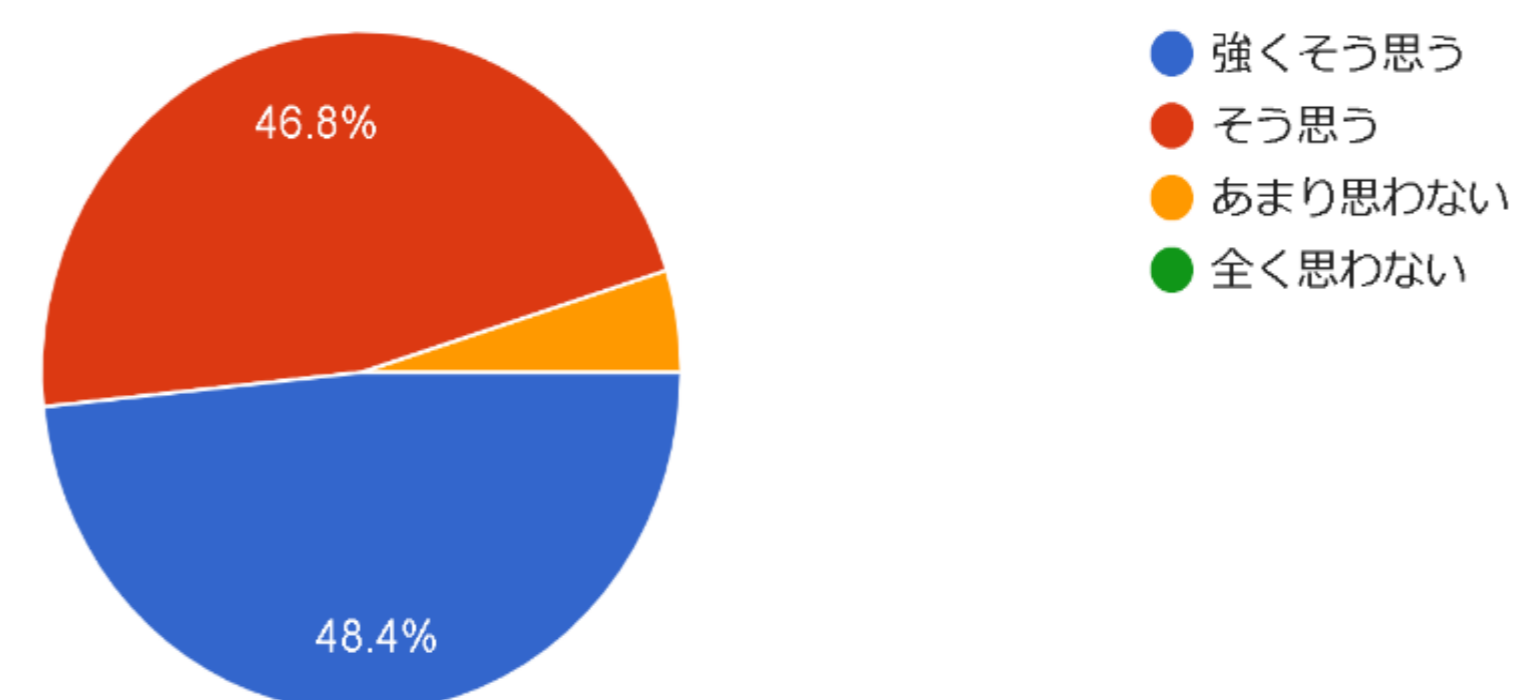
- ②あなたは「アエタ」の人々に会ってみたいと思いますか？
62件の回答



Q3：アエタの人々に持った印象はなにか

- A3：（一部抜粋）
- ・一般的なフィリピンのイメージだった
 - ・可哀想
 - ・自由そうだなと思った
 - ・過酷な環境を生き抜いている強い人々であり、栄養がとれているか心配にもなった。
 - ・アエタの方々が自分たちの暮らしをどう思っているのか分からないので可哀想とは思わないが、貧困を筆頭とした様々な問題を抱えているため心配に思った。特に衛生環境が心配。

- ④彼らに対して、金銭的な支援・物資の供給・教育の充実のような支援は必要だと思いますか？
62件の回答



Q5：具体的に必要な支援内容について

- A5：（一部抜粋）
- ・教育の充実
 - ・衛生的な環境作り
 - ・物資の供給

【支援を必要と考えていない人の意見】

- ・事実、彼らが課題に困っているのなら支援すべきかもしれない。しかし、彼らは狭いコミュニティの中で生きていて、その生活様式が彼らの普通であり、現状を特に課題だと考えてはいないのだとしたら、彼らのコミュニティに手を貸して、文化を変えるべきではない。

3 まとめ

【アンケート】

- ①ツアー参加者：自己とアエタ族の共通点や相違点を尊重し合う関係性を実現したい →文化を集団としてではなく個人のものとしてとらえている印象がある
- ②一般の学生：アエタ族には教育や衛生面を中心に支援が必要／彼らが支援を本当に必要としているかはわからない →個々の価値観から生まれたイメージが具体的な意見に

【全体】

- ・異文化に触れたときにはまず自身の価値観からの位置づけがなされる
- ・自己の文化との相違を相対化するには現地での経験が不可欠
- ・経験と衝撃を繰り返せば異文化理解が他者理解になる
→文化を個々のものとして理解・受容しようとする

4 参考文献

- ・青木 保 (2001) 『異文化理解』岩波新書。
- ・鍋倉 健悦 (1997) 『異文化間コミュニケーション入門』丸善ライブラリー。
- ・原沢 伊都夫 (2013) 『グローバルな時代を生きるための異文化理解入門』研究社。